

## 令和3年度上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会

### 第2回対人援助スキルアップ部会を開催しました



○12月3日（金）上越市福祉交流プラザにて、第2回対人援助スキルアップ部会を開催しました。参加者は、部会メンバー8名と在宅医療推進センターコーディネーター2名、事務局3名でした。

○昨年度実施した事例検討が日頃の振り返りや支援の考え方を学ぶ良い機会であったことから、今回も事例検討を行いました。事例発表・意見交換を行ったあと、揚石先生から講話をいただきました。

【事例の概要】事例提供：瀬下委員

- ・90代夫婦の二人暮らし
- ・約5年前に息子夫婦のいる上越地域に移り住み、二人穏やかな生活を送っている
- ・病気をきっかけに介護認定を受け、アセスメントにより、リハビリや交流の必要性があったが、本人の拒否があり、サービス導入につながらない

【事例を聞いての感想・意見】

○丁寧にお話を聞き、アセスメントしている。課題の遂行に偏りがちだが、今の生活を継続するにはどうしたらよいかを一緒に考えてはどうか。

○二人で支え合っている。もしものときの二人の思いはどうか。家族も一緒に共有できるとよい。

○ご主人の定年後30年以上、「二人」で

生活している。住み慣れた地域を高齢期に離れたことはすごいことで、当時は何かしらの不安があったはずだが、それを決断した二人だからこそ、今は幸せなのかと思う。この「幸せ」が「変えられちゃう」という不安があるのではないか。

○医療との連携はどのような。穏やかに生活していくためにも、主治医の関わりを増やしていったらどうか。

○互いに足りない部分はあるものの、支え合っている。人から世話になっていない、ということがご本人の自慢なのではないか。

○本人の強み、支えは何かを考え、あわせてリスクを考えていく必要がある。

【揚石先生からの講話（抜粋）】

○ご本人と支援者の立ち位置を考える。ご本人の感覚→「高齢の割にはきちんと自分のことができています。今の暮らしを維持したい」をそのままに、「〇〇のために」「教えてください」の関わりが大切。

○ジョアン・ハリファックス氏による援助の考え方より、①「先を急がず」本人と関わる人の関係性を重視 ②「過去に頼らず」支援者は肩書にこだわらず、全人的な関わりをしていこう。

★今回も事例から、信頼関係を深め誠実に関わることや結論を慌てずに謙虚に関わることを学びました。

★妙高市において、昨年度部会の事例を活用した対人援助スキルアップ研修を行いました。詳細は別紙をご覧ください。

★次回も事例検討を行う予定です。